

# 赤十字国際ニュース

2020年 第26号 2020年7月1日  
(通巻 第1383号)

日本赤十字社 国際部

東京都港区芝大門1-1-3 TEL 03-3437-7087 / FAX 03-3437-0785

E-mail: [kokusai@jrc.or.jp](mailto:kokusai@jrc.or.jp) <http://www.jrc.or.jp/>

## ■ 日赤事業担当職員が語る！～新型コロナウイルス感染症に対応する各国赤十字社～（後編）

日本赤十字社（以下、日赤）では、世界各地に職員を派遣して、現地の赤十字社とともに人道支援活動を行っています。ところが、現在は新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の影響で渡航が制限されており、駐在職員も本年3月までに一時帰国し、日本から業務を続けています。

ルワンダ、フィリピン、ネパールからそれぞれ帰国中の職員が今思うこととは？[先週の前編](#)に引き続き、いよいよ後編です。（日赤ウェブサイトには[ロングバージョン](#)を掲載中です。是非こちらも[ご一読ください](#)！）

### ■ いつもの活動が出来ない！～ジレンマと赤十字のパワー～

（吉田拓さん、以下「吉田拓」）今回の新型コロナの状況になって、とてもジレンマを感じていることがあります。それは「直接会えない」ということです。そもそも赤十字の活動の強みは、社会的ニーズに合った顔を合わせて伝える・支える‘アナログ’なコミュニケーションです。しかし今は、「3密」の状態を防ぐために実施することが出来ません。赤十字が得意とする方法が取れず、間接的なやり取りをせざるを得ない環境であることが、本当にジレンマです。皆さんはもどかしさを感じていませんか？



ルワンダ赤十字社の新型コロナウイルス感染予防について啓発活動の様子。動画はウェブサイトをご覧ください©RRCS

（吉田祐子さん、以下「吉田祐」）フィリピン赤十字社（以下、フィリピン赤）は、まさにルワンダと同じで本来の得意な活動が難しくなっています。そんな中でも、フィリピン赤が取り組むのは、ヘルプライン1158と呼ばれる電話相談です。研修を受けたボランティアが毎日24時間、人々の不安の声やストレスについて傾聴する心理的なサポートに加え、検査施設の案内や感染疑いのある方の搬送サービスにつなげる活動を行っています。直接に会えなくても、人々のところに寄り添い適切なサポートを提供するこの活動は、今出来るボランティア活動の最良の形のひとつだと思います。



フィリピン赤十字社の電話相談の様子  
©PRCS

（五十嵐和代さん、以下「五十嵐」）地域の赤十字ボランティアの力、というテーマからは少し離れますが、ルワンダやフィリピンの赤十字社では血液事業は実施されていますか？ネパールでは、日本と同じく[血液事業](#)を担うのは赤十字社の大切な任務。民家の軒先などに小規模な会場を設置して、必要とされる量を確保できるよう工夫や努力を重ねています。コロナ禍にあってもネパールの医療を支えるエッセンシャルワークの一つだと思います。

### ■ 試されているのは私たちのあり方？

（吉田祐）今回のコロナ禍で痛切に感じたことで、支援の在り方を考えさせられたことは、日本

でもフィリピンでも、都会でも田舎でも、私たちの生活・命が「お金」で縛られているということです。災害対応では、生活支援のための現金給付という方法がありますが、世界中で広く行われており<sup>1</sup>、その額は着実に増えています。私はもともと一時的性質が強い支援に疑問を持っていたのですが、一時しのぎであっても、今の危機をとにかくやり過ごし、時間的余裕が得られる現金給付は、お金の縛られた生活で命をつないでいるからこそ、意義ある支援の形であることに気づかされました。

(吉田拓) 確かにそうですね。僕も支援の形については日々考えます。これまでは、先進国の経済的資源・知的資源をもって、災害や社会課題に立ち向かえる、そのやり方を教えてあげるといったスタンスで仕事をしてきました。ところが、こと新型コロナ対応は、世界で解決するリソースがない問題。そんな中で、本当に解決されるべき問題を見つける力と、ルワンダ赤十字社スタッフや事業地の皆さんの力を最大限に引き出す力が試されていると思う今日この頃です。



ネパール赤十字社の事業を担当する五十嵐和代職員（左） ©JRCS

(五十嵐) 支援のありかたについては例えば寄付金について私も考えています。新型コロナ対応では、支援を送る側だった国での感染や死者の数が大きく、途上国の新型コロナ対応への支援は集まりにくいようです。ネパール国内の赤十字の例を挙げれば、進行中の事業費の一部を新型コロナ対応に充てることが多く、ネパール赤十字社が計画に沿って全土で活動するには、まだまだ資金面での支援が必要です。こういった支援のマッチングの難しさもあります。

## ■遠く離れた友人を思うころ

(五十嵐) 自然災害が多いネパールで厳しい環境の中で生きる知恵と、地域住民同士で支えあい生きる力を日頃から感じています。今回の新しいウイルスについては、ワクチンも治療法もまだ確立されていない中で、彼らの生きる知恵や互助の精神がどう活かされるのか、そして、そんなネパール人をどのように支えられるか、日々考えています。

(吉田拓) 今回のコロナ禍は、多くの先進国にとって、被害規模の想定がつかず、かつ、正しい解決の道筋はどこにもない災害、という意味で、途上国の貧困層にとっての災害と似ていると思うことがあります。個人の安全は自己責任という社会と、お互いに助け合うことが前提の社会とどちらがしなやかに立ち回れるか、長い目で観察して、教訓を得たいですね。

(吉田祐) フィリピンでは、新型コロナ流行以前から、2019年2度の地震があったミンダナオ島や2020年1月のタール火山噴火に見舞われたマニラ首都圏に隣接する地域等、災害からの立ち直りに苦勞する地域がいくつもあります。すでに厳しい生活を送っている人には、感染症対策も難しく、生活の厳しさに加えて、感染症のリスクにもさらされています。これから台風シーズンが到来しますし、とても心配しているところです。

前号・今号2回にわたり、職員の対談をお届けしました。世界中が共通の新しい課題に直面しており、赤十字のネットワークでも人々の命と健康を守りたいと考え、日々模索を続けています。

(日赤ウェブサイトでは、さらに詳細な対談の様子をお読みいただけます！)



ルワンダ赤十字社の活動で設置した足踏式手洗い場で手を洗う村の女性 ©Atsushi Shibuya



<sup>1</sup> 国際赤十字・赤新月社連盟ウェブサイト「Money matters: delivering cash to people in crisis」参照（英語）<https://future-rcrc.com/2019/04/23/money-matters/>